

【論文】

美術系高校・大学への進路は どのように選択されるのか

——大学生への質的・量的調査をもとに——

喜 始 照 宣

1. 問題設定

本稿の目的は、美術系大学・学部（以下、「美大」という）の学生に対する質的・量的調査をもとに、かれらが高校の美術科・コース（以下、「美術系高校」という）や美大への進路をどのように選択したのか、またどのような要因がそうした選択を促したのかを明らかにすることである。

現在、日本では、首都圏をはじめ全国各地に専門美術教育をおこなう教育機関が多数存在している。特に美大は、国内外の芸術分野で広く活躍する作家、デザイナー、建築家等をこれまで幾人も輩出してきた。美大は、日本における芸術に関わる専門家養成過程を理解する上で不可欠な存在であり、美大出身者の社会での存在感も決して小さくない。だが、そうした存在感の大きさに相反して、美大進学者は、大学進学者全体から見て、少数派である。平成29年度学校基本調査によると、「芸術」関係学科の大学生数は全体の2.7%（約7.0万人）であり、「美術」の学生は0.4%（約1.1万人）、「デザイン」の学生は0.7%（約1.8万人）のみである。また、多くの中・高生にとって、美術に関わる職に就くことや美大に進学することが「身近な」選択肢とはなっておらず、美大進学者は学校教育における周辺的存在であると言っても過言ではない。

では、美大への進路選択は何によって促され、可能となるのだろうか。美大進学に関する先行研究はいくつかある。例えば、ベネッセ文教総研（2002）の大学生調査では、芸術系の学生は、他の学部系統と比べて、大学・学部を決める際に重視した項目として、学びの内容や教授陣を挙げる傾向が強いことが示されている。また、具体的に美大への進路選択過程を検討した研究として生駒（2007, 2010）がある。生駒（2007）では、中・高生時から好きであり、得意であった造形活動を将来の仕事にしたいという生徒本人の志向性に加え、「他者からの高い評価を受けるといった経験が（中略）美術系の大学への進学や仕事への志向を強化」（生駒2007, p.200）することが指摘されている。だが、高校2、3年生時に美術系大学志望者は半減し、他学部へと進路変更する生徒も多いという。他方、生駒（2010）では、美大への進路形成過程は「直線的」でなく、また美大進学決定時に多くの生徒が自らの才能・技量が社会で通用するのか、そして将来就職で

きないのではないかということに不安を抱いていたことが報告されている。さらに、美大の学生を対象とした質問紙調査をもとに、かれらの小・中学生時の美術活動・経験について分析した喜始（2018）では、1）美大の学生の共通要素として、日常的に制作活動を行うディスポジションの形成、学校での美術に関わる褒賞の蓄積、中学時点での美術成績の高さが挙げられること、2）それらの要因がその後の美大進学を選択に影響した可能性があることが結論として提示されている。

しかし、これらの研究では、進路選択過程においてどのような要因からの影響が本人にとって重要な意味を持っていたのか、またかれらが置かれていた状況、例えば、美術系高校か否か、進学校か否かによって、美大進学の「重み」はどう異なるのかについては十分解明されておらず、検討の余地がある。そこで本稿では、美大の中でも、難関・中堅美大の学生に焦点化し、これらの問いの解明に取り組む。そしてこの作業を通じて、日本の芸術系大学研究を進展させ、進路選択研究に新たな視点をもたらすことを試みる。

2. 調査データの概要

以下の分析では、美大の学生を対象に筆者が独自に実施した質問紙調査、聞き取り調査のデータを使用する。どちらの調査も、比較的選抜度の高い難関・中堅の美大を対象としている。

まず、質問紙調査は、2013年7月～11月に、全国の美大4校（W大学～Z大学）の学部生を対象に集団自記方式で実施されたものである。下記の聞き取り調査は美術系学科の学生のみであるが、この質問紙調査データには、美術系学科だけでなく、デザイン系学科（建築含む）、理論系学科（芸術学など）、その他学科（映像・メディアなど）の学生も含まれる。有効回答数は526名である。ただし、本稿では、少数である留学生による回答を除いた、513名のデータを分析対象とした。分析対象者のうち、女性が77.8%、1・2年生が93.0%である。学科別には、美術系28.8%、デザイン系54.0%、理論系6.6%、その他9.9%、無回答0.6%である。また、大学別には、W大学（地方部、国公立、小規模、上位）が88名、X大学（地方部、私立、中規模、中位）が94名、Y大学（都市部、私立、大規模、上位）が240名、Z大学（都市部、私立、中規模、中位・上）が91名である¹⁾。回答者の出身高校タイプの内訳は表1にまとめている。表1

表1 出身高校のタイプ（学科別）（質問紙調査）

	高校・学科					合計 (N)
	普通科	美術科	それ以外の 専門学科	総合学科	その他	
男性	72.3	17.9	8.0	0.9	0.9	112
女性	65.2	27.5	4.3	2.5	0.5	397
男女計	66.8	25.3	5.1	2.2	0.6	509

注：「美術科」にはデザイン科、工芸科、普通科・美術コースなどを含む。

から、全体（男女計）の70%弱が普通科出身であるが、美術科の高校出身者も約25%いることがわかる。

つぎに、聞き取り調査は、2010年1月～2012年6月に、東日本に所在する美大の学部生・院生を対象に実施されたものである。聞き取りはフォーマルな状況下で、半構造化法により実施された。また、調査協力者の許可のもと、会話はすべてICレコーダーで録音され、そこから逐語記録を作成した。対面や電話での聞き取り実施が難しい場合、自由回答形式のアンケートで代用した。アンケートの内容は、聞き取りでのおもな質問項目をもとに作成されており、ほとんどの協力者から十分な情報量の回答が得られている。

本稿で分析対象とするのは、首都圏及び地方都市にある美大5校（A大学～E大学）の美術系学科（絵画、彫刻、工芸等）の学生60名（うちアンケートによる回答15名）のデータである。対象者のほとんどは、調査依頼時点で学部4年生か修士課程2年生であった。この60名の中には編入学者も数名含まれるが、かれらの語りは参考データとして扱った。対象者の内訳を大学別に見ると、A大学（都市部、国公立、小規模、上位）が16名、B大学（都市部、私立、中規模、中位・上）が10名、C大学（都市部、私立、大規模、上位）が16名、D大学（都市部、私立、大規模、上位）が9名、E大学（地方部、私立、中規模、中位）が9名である²⁾。また、高校別には、美術系高校（美術系学科・コース）の出身者が17名、非美術系高校（普通科など）の出身者が43名である。これは、表1で示した質問紙調査での2者間の比率と大きく異ならない。

なお、以下で語りを引用する際、対象者の氏名はすべて仮名とし、筆者による補足は〔 〕内に記し、語りの一部を省略する場合は……で示した。また、自由回答形式のアンケートより得られた語りには、その文章末尾に*を付して区別した。

3. 分析の結果

前節で示したように、美大進学者の約4分の1は美術系高校出身者である。かれらの場合、すでに美大進学を念頭に高校選択をした可能性が考えられる。そこで、本節では、美術系高校出身か否かで美大進学のきっかけや理由には差異があると想定し、1)美術系高校出身者の中卒後進路選択とその後の美大進学の間緯(3.1)、2)普通科等の非美術系高校出身者の美大への進路選択(3.2)を区別して分析を行う。分析に際しては質問紙調査と聞き取り調査を組み合わせているが、質問紙調査データは、おもに進学理由や周囲からの反対の有無、中高生時の成績等の傾向を把握するために用い、聞き取り調査データは、美術系高校や美大への進路選択を促進した要因の抽出を試みるために用いている。なお、2つの調査では対象大学は必ずしも一致しておらず、聞き取り調査は美術系学科の学生のみであることには留意されたい。

3.1. 美術系高校への進路選択

3.1.1. 進学理由の分布

なぜ美術系高校が中卒後の進路として選ばれたのだろうか。この点について質問紙調査の結果の検討からはじめる。表2に示したのが、美術系高校に進学した理由についての回答である。複数回答と最も重要な理由（複数回答で選択した項目のうちから1つ選択）の回答の2つの結果を載せている。これを見ると、複数回答では、「将来美術に関わる仕事をしたいと考えていたから」の割合が83.6%と最も高く、「美術が得意だったから」（76.6%）、「専門的な技術や知識を身につけたいから」（69.5%）、「自分の趣味と関係していたから」（66.4%）がそれに続いている。美術系学科の学生に限定すると、「美術が得意だったから」が81.8%と最も高いが、大まかな傾向は全体と変わらない。最重要理由でも、4割前後の者が「将来美術に関わる仕事をしたいと考えていたから」（全体：46.0%、美術系学科：35.2%）を選択している。美術系高校進学者の場合、その多くが高校受験の段階からすでに将来美術関係の仕事に就くことを目指していたと推測される。

表2 美術系高校に進学した理由

	全体		大学・美術系学科	
	複数回答	最重要理由	複数回答	最重要理由
将来美術に関わる仕事をしたいと考えていたから	83.6	46.0	74.5	35.2
専門的な技術や知識を身につけたいから	69.5	12.7	63.6	13.0
家族や親戚にすすめられたから	22.7	1.6	23.6	1.9
学校の先生にすすめられたから	19.5	3.2	21.8	7.4
美術が得意だったから	76.6	7.1	81.8	5.6
勉強が苦手だったから	32.0	3.2	36.4	5.6
第一志望の高校の受験に失敗したから	3.1	1.6	3.6	1.9
自宅から通いやすかったから	10.9	0.8	3.6	1.9
自分の趣味と関係していたから	66.4	10.3	58.2	9.3
なんとなく	10.9	2.4	10.9	1.9
その他	10.9	11.1	18.2	16.7
合計 (%)	—	100.0	—	100.0
(N)	128	126	55	54

3.1.2. 美術系高校の選択の背景要因

つぎに、聞き取り調査をもとにした、美術系高校への進路選択の分析に移ろう。まず当然ながら、地元（有力な）美術系高校がない場合、それは中卒後の進路の選択肢にはあがってこない。また、中学生の時点で、将来美術系の進路を考えていたとしても、「視野が狭くなる」「高校までは教養を身につけるべき」といった本人や親の意向で、美術系高校への進路は選択されない場合もある。非美術系高校出身の美大進学者の中にはそうした例が複数語られた。例えば、「高校まではある程度の一般教養を身につけたかったから、普通科に進学しました。*」と菊池（女性 D 大学・日本画4年）は語っている。

では、美術系高校への進学は何によって促されるか。以下では、a) 専門美術（家）への憧憬、b) 他者からの役割期待、c) 学力による序列化への違和・抵抗感、d) 美術系高校文化との接触の4点を美術系高校の選択を促進した要因として取り上げ、順にその内容を説明する。

まず、多くの美術系高校進学者にとって、【専門美術（家）への憧憬】がその選択の背景にある。表2でも示したように、将来美術に関わる仕事（画家、イラストレーターなど）に就きたい、継続的・専門的に美術を学びたいという本人の志向性が、美術系高校の「自発的な」選択を可能としている。例えば、公務員の父を持ち、家族からの芸術に関わる相続文化資本は少なかったが、幼少期から美術が好きで得意だったという内山（女性 A 大学・油画4年）がその一例である。

内山：結構小さい頃から、絵が得意な方で、小学校の時からかな、やっぱり（笑）ずっと、賞状とかバンバン貰うみたいな（笑）、絵上手だねみたいな感じ、でも、運動も好きだったんで、中学入るときに、美術部か陸上部か迷って、でもそんな根性なかったから（笑）、美術部入って。でも、そのままやっぱりずっと絵は好きで、高校もそのまま美術科行っちゃおうって感じで、受験して、美術科に入りました。

——家に絵がいっぱいあったとか、そういうのですか？

内山：いや、全然。自発的に、うん。

また、このように「自発的に」美術系高校を選択したその背後には、日常的なモノづくり・描画という行為によって獲得・身体化された文化資本（ハビトゥス）の蓄積があることも指摘できる。例えば、青山（女性 B 大学・彫刻4年）は、「絵画の修復士になりたいなあとと思って、美術高校に入ろうと思って、中3の夏からデッサンをやった」と語るが、下記のような幼少期での経験やそれを起点とした日常的な美術活動の継続があったことで、中卒後進路としての美術系高校という選択が可能になったと推察される。

青山：私は、漫画とかはあんまり読みません。それで、影響はたぶん、近所のお兄ちゃんが、天井に絵描いたりするような人で、自分の家を、すごい、自分で、こう、絵を描いてる人で、そこにあった色鉛筆とか、絵の具とかそういう、ちょっと汚い箱なんだけど、そういうものには、憧れたっていうのはかなりあると思います。

——小っちゃい頃から、よく絵描いてたりしたんですか？

青山：そうですね。だから、妹と私は絵を描くんだけど、近所の子たちは他の遊びしたいから、よく、二人で、だから、ほとんど、描いてた。

しかし、そうした本人の志向性に由来する自発的な選択だけではなく、【他者からの役割期待】、具体的には教員などからの勧め・後押し、あるいは友だちや教員などからの評価によって、美術系高校への進路が決定・変更される場合もある。まず、教員から勧め・後押しを受けた例として、西川（男性 C 大学・彫刻院2年）がいる。彼は小学校の頃から画家になる、少なくとも何かクリエイティブな職には就きたいと思っていた。また、美大進学も中学以前から考えていたが、高校は美術科ではなく、他にいきたい学校があったため、そちらの学校を受験しようと思っ

ていた。だが、中学校の教員から「お前は美術に行け」とずっと言われ続け、彼自身勉強もあまり出来なかったことから、美術系高校の受験を決めたという。

他方、友だちなど身近な他者からの評価によって、美術系進路が定まった例としては西田（男性 C 大学・彫刻 4 年）が挙げられる。彼の場合、日常生活において美術に関わる活動することは少なかったが、中学入学以前から同級生によって「美術キャラ」と評価（ラベリング）されていたため、自分にとって美術系高校に進むことが「自然な」選択肢となったことを語っている。

——普通科行った方がいいと言われたりはなかったんですか？

西田：いや、特に。中学でも相変わらず美術キャラみたいな感じでは。授業中、美術の授業でしか全然絵は描かなかったんですけど。絵が上手い風な感じでしたね（笑）。別に成績、成績もそこそこだったんですけど、今思えばそんなに、別に他の子と大して、上手さかわないんですけど、そんな時の雰囲気ですね。ああ、あいつは絵が上手いキャラみたいな（笑）、それで周りも「ああ、そうなんだあ」みたいな、全然自然とさらっとって感じでしたね。

そして第 3 に、【学力による序列化への違和・抵抗感】、あるいは学力・偏差値による序列化からの脱出ということが、美術系高校選択と関連して語られた。つまり、高校進学によって学校教育という場にとどまりはするが、主要教科による成績によって測られる「学力」を重視する価値観（以下、「学力主義」という）との距離化を可能とする選択として、美術系高校進学が位置づけられているのである。こうした偏差値的序列化への抵抗感を語った例として、先に登場した西田や西（女性 E 大学・油画 4 年）がいる。美術で褒められることは多かったが、中学校時には授業以外で絵を描くことはほとんどなく、小学校時も外で友だちと遊ぶ方が好きだったという西は、美術系高校へ進むことにした経緯をつぎのように語っている。

西：美術系の高校だったんですけど、中学校のときは全然絵を描かなくて、でも、別に私は勉強できるわけじゃなかったし、吹奏楽部だったんですけど……それも別に、すごい上手いわけではなくって。で、受験時とかって、結構、頭いい順に見られるじゃないですか……あの高校受けるからあの子はすごいみたいな。下の高校だったら、あいつバカなんだねみたいな、風な、価値観じゃないですか。中学校の頃って、それがすごい悔しいというか、そういう風な価値観で、人を見るのって、ちょっと違うんじゃないのかなって思って。で、私は、その中の空間に入りたくないと、高飛車に思って。で、美術とかは結構褒められてたんで、だから、こっちだったら、自分にしか出来ないことがあるんじゃないのかなと思って、もう思い切って、そっちの方向に行こうって決めて、だからちょっと反発精神みたいなことですよ（笑）。

ここに見られるように、彼女は、受験期において学力による生徒の序列化が強化され、同級生たちがお互いを受験高校のレベルに応じて差異化し合うことに違和や悔しさを感じ、そうした価値観に対する「反発精神」から、美術系高校に進むことを決めている。また、「その中の空間に入りたくない」という言葉に表れているように、美術系高校への進路を選ぶことは、学力主義が強力な磁場の外部に出ること、すなわちその磁場からの距離化として語られている。学力による

序列からの距離化によって、「自分にしか出来ないこと」の追求が期待できる分野として、美術による表現が評価対象として重視される場（以下、「美術領域」という）への参入が促されたのである。同様に、西田（男性 C 大学・彫刻4年）も、偏差値的序列によってではなく、自らの「やりたいこと」を基準にして、「普通の、勉強して行く」進路ではなく、美術領域へ進むことを選んだことを語っている。また、「ちょっと環境変えてみたいな」という言葉にあるように、それまでいた学力主義の強い環境とは異なる場として美術系高校を位置づけている。

——高校はどうして美術のコースに？

西田：普通の、勉強して行くっていうのがあんまり、じっくりこなかったっていうか、実感がなかったっていう方が近いかもしれないですけど。友だちと偏差値とか気にして高校に行くよりは、やりたいこと出来るんだなって思って。高校から「自分で進路を」選べるじゃないですか。そういうので、じゃあ、せっかくだから、勉強するよりも絵描きたいなと思って。絵を勉強するっていうよりは、授業のほとんどが美術だから面白いんじゃないかみたいな感覚で選びましたね、そのとき。

——普通科はあんま考えなかったんですか？

西田：考えなかったですね。正直、そんなに、行けるほど、ずば抜けて頭が良くも悪くもなかったんで（笑）。ちょっと環境変えてみたいなっとは思いましたね。

——ほかに「美術系の高校」行った人いるんですか？

西田：僕の学校では、いなかったですね。

ただし、同じ学力主義からの距離化を語った例ではあるが、西と西田では、その選択のあり方は異なっているように思われる。西の場合、受験期に突入し周囲の生徒たちの変化を目の当たりにしたことを転機³⁾として、学力主義の強力な磁場を逃れるための手段を反省的に考え、自らの特色を活かせる進路を選んでいるようだが、西田の場合は、それほど大きな転換点はなく、美術領域に進むことが自らにとって自然であるかのように選択されているのである。

ここで注目されるのが、かれらの学校内・クラス内でのポジションとその自認の差異である。特に西田が、日常生活において美術に関わることは少なかったが、中学入学以前から同級生によって「美術キャラ」と評価（ラベリング）されていたため、普通科高校のような「普通の」進路は実感が湧かないものであったと語ることは興味深い。彼の家族に芸術に関わる職業に就いている者はいないことを考えると、彼の美術系進路を志向するディスポジションは、他の生徒たちとの関係性を通じて、自らの「美術キャラ」としての学校内・クラス内でのポジションを身体化するかたちで「自然と」形成されていったのだと考えられる。そのため、美術科以外の選択は、彼に「じっくりこなかった」と語らせるものとなったのではないだろうか。また、西の場合も、かりに美術で褒められてきた経験がなければ、美術系高校が選択肢として浮上することはなかったと予想される。かれらにとって学力との距離化としての美術系進路の選択が可能となるためには、そうした選択をするに相応しいと考えられるだけの学校内・クラス内でのポジションがかれらに与えられている必要があり、そうでない場合、その決定は困難であったと推測される。

この点に関して、以下の奥村（女性 A 大学・日本画2年）の語りも示唆的である。

奥村：言葉とかそういうテストの点数とかだと人には認めてもらえないんですよ。そう偉そうなこと言っても「お前、点数取れないじゃん」みたいな、「バカじゃん」って指されるんですけど、絵で、それがいい作品であれば、納得してもらえるわけですよ。それが自分が価値があると思ってることと、人がいいと思ってもらえることがリンクした内容だったから、それをたぶん選んだ。自分はですけど（笑）。

彼女の語りから、自己の価値観とそれに対する他者からの評価とが「リンク」していたことが、学力に代わる基準に自らの身を託す決め手となったことがわかる。つまり、学力主義的な場の外部に置かれる美術領域への進路は、他者による評価を手がかりとした学力主義的な場の内部での自らのポジショニングの所産として選び取られたものであると考えられる。また、こうした学力による序列からの距離化は、後述するように、学校教育という場における支配的なルールや価値観に揺さぶりをかけ、自らの存在論的安心を確保するための暗黙の戦略としても位置づけられる。

ちなみに、質問紙調査から、中学3年の時のすべての科目及び美術の成績を示したのが表3である。これを見ると、美術の成績に関しては、美術系高校進学者か否かで有意な差は見られないが、すべての科目に関しては、高校・美術科に進学した者の方が、それ以外の者と比べて、成績の自己評価が下方に位置づくことがわかる（1%水準で統計的に有意）。聞き取り調査の結果も踏まえると、中学時点で学力的な基準での評価に違和感を抱いており、実際にそうした評価基準の下での自己のポジションに満足できなかったゆえに、美術による評価が重視され、より自らの存在価値が認められるだろう領域として美術系高校を選んだ者も少なくないと推測される。

表3 中学3年生の時のすべての科目・美術の成績（出身高校・学科別）

		校内での成績					合計 (N)	
		上のほう	やや 上のほう	中くらい	やや 下のほう	下のほう		
中学 3年 時	すべての 科目**	高校・美術科	9.5	31.7	38.1	14.3	6.3	126
		高校・それ以外	25.7	30.9	30.6	8.7	4.1	369
		高校計	21.6	31.1	32.5	10.1	4.6	495
	美術 n.s.	高校・美術科	67.7	17.3	11.0	1.6	2.4	127
		高校・それ以外	62.2	20.6	11.5	2.9	2.7	373
		高校計	63.6	19.8	11.4	2.6	2.6	500

注：†: $p < 0.10$, *: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$, ***: $p < 0.001$. χ^2 検定による。

最後に、【美術系高校文化との接触】が転機となり、美術系の進路に進んだ例を取り上げる。幼少期から人見知りや激しく、人と話すことが苦手だったが、絵を描くことによって他者とのコミュニケーションの機会を得ていたという坂田（女性 E 大学・工芸4年）の語りを見よう。彼女にとって、文化祭で体験した美術系高校は「絶対ここに入りたい!!」というほどの印象を伴っ

たものであったという。

坂田：友人のお姉さんが、美術の高校に進学をしていて、文化祭に招待されて、遊びに行ったとき、「絶対ここに入りたい！！」と、思ったからです。室内の装飾が、ここは教室であるということを感じさせないくらい当時の私にとって衝撃の空間で、廊下にはたくさんのイラストや絵画が展示してあり、このような楽しい世界を勉強として学べるなんて、最高の場所だと思いました。*

「衝撃の空間」という言葉に表れているように、文化祭で見た美術系高校の情景は彼女の学校観を大きく変えるものであったことが、ここからわかる。幼少期から日常的に絵を描くことを続け、モノづくりの習慣を身体化してきた彼女にとって、こうした体験は、現在ある彼女の志向性を肯定し、また強化するものであったと言えよう。

また、このような空間的な特性だけではなく、その内部の人間関係や集団形成、行動様式などの点においても、美術系高校には、彼女がそれまで身を置いていた世界とは異なる学校文化が定着していることが、彼女が語る高校時代の様子から推察される。美術系高校は、学力主義の影響からの距離化が果たされた環境であるからこそ、個々人の共通性は高いが、「個性」を消し合わないような、独自の文化を学校教育という場の内部において形成しているのかもしれない。

坂田：一言でいうと、みんな自由で気楽な空間でした。／中学時代、女の子の人間関係で悩まされることが度々ありました。この時期の女の子は、とてもグループ意識が強いというか、女子特有の集団意識のようなものがあり、堅苦しく思っていました。例えば、一人で行動している子がいると、いじめられているのではないかと、集団から孤立しているようにとられてしまうような視線です。しかし、高校は美術のクラスに進学したので、それぞれ自分の世界があり、個人の独立心が強いので一人で行動している人がいても不自然ではない印象でした。自分の個性を大事にしつつ、みんな好き勝手やっているように見えて、美術が好きだということで、なにかと共通点が多く、団結するとすごいパワーになるような、一人、一人のイメージの強い高校時代でした。*

以上、美術系高校への進路選択に影響したものとして語られた4つの要因について見た。

では、このような理由から美術系高校へ進学した者たちは、なぜ美大に進学することを選んだのだろうか。美術系高校とはいえ、生徒全員が美大へと進学するわけではない。しかし、本分析対象者である美大進学者の場合、高校入学後は、美術をさらに専門的に学びたいと美大進学を当然のものと考えられるようになるか、美術以外の進路に実感が沸かなくなるという様子が見えてきた。例えば、足立（女性 E 大学・油画4年）は、「高校は美術コースで、美術が好きでな子が多く、美大に行ってる先輩との交流もあり楽しかった*」し、「高校の先輩達の多くが美大に行っていて、[美大に行く理由は]あまり考えなかった。*」と述べている。ここから、美術系高校からの美大進学背景にはカリキュラム・トラッキングの効果があるのではないかと推測される。

ただし、市川（女性 B 大学・油画4年）の語りにあるように、美術系高校においてでも漫画・アニメやデザインを志向する生徒が多く、美術系は少数派であることには留意する必要がある。

る。

市川：美術系 [高校] の中でも、マンガとかが好きな子が多くて……かなり少数派だったんですよ、ホントに美術やりたい子って。だから、デザイン系に進みたい子も多かったし、だから、ホントに、自分と心を分かち合える人っていうのはいなかった。大学入ってから、そういうノリで来てる子がわりと多くて、美術っていうものをちゃんとわからないまま、何となく、美術得意だから来たって子がほとんどで、だから、面白くなかったし。段々、[大学] 1年、2年、3年ってなると、やっと自分がやりたい方向性みたいなものが、見つけていくから、やっと、私も、話せるようになって、周りとか。

3.2. 非美術系高校から美術系大学への進路選択

つづいて、非美術系高校からの美大進学を選択について検討する。表1で見たように美大進学者の7割以上が非美術系高校の出身であるが、中学卒業後の進路として、美術系高校ではなく、学力主義の強い場にとどまることを選んだ者たちを、何が美大進学へと踏み切らせたのだろうか。まず知っておく必要があるのは、普通科等の高校出身である分析対象者の多くが、高卒後に大学進学することが主流な高校、いわゆる進学校に在籍していたか、大学進学をもともと志望していた者であることである⁴⁾。これには家庭環境、特に父母の学歴からの影響があると考えられる。つまり、大学進学とはほど遠い社会的条件下にある生徒にとって、美大進学は、何らかの転機やきっかけがない限り、リアリティのある選択肢になりにくいと考えられる。

3.2.1. 進学理由の分布、周囲からの反対の有無

以下では、まず、質問紙調査の分析から、美大への進学理由の分布、及び美大受験に関する周囲からの反対の有無について検討する。

表4に示したのが、美大に進学した理由についての回答である。表2と同様に、複数回答と最も重要な理由の回答の2つの結果を載せている。これを見ると、全体の複数回答では、「将来美術に関わる仕事をしたいと考えていたから」の割合が82.1%と最も高く、「専門的な技術や知識を身につけたいから」(66.1%)、「自分の趣味と関係していたから」(56.0%)がそれに続いている。美術系学科の学生に限定すると、「美術が得意だったから」も54.8%で高い値となっている。

他方で、高校の美術科出身か否かによる進学理由の違いを見てみると、高校・美術科出身の学生では、それ以外の学生と比べて、複数回答での「学校の先生にすすめられたから」の割合が37.5%と高く、高校・それ以外の値(11.1%)と25ポイント以上の差があることは注目される(表4)。先の分析で、美術系高校からの美大進学にはカリキュラム・トラッキングの効果がある可能性を指摘したが、それだけではなく学校の教員からの働きかけによってもそうした「水路づけ」が強化されていると推察される。それとは反対に、非美術系高校出身者では、他者(家族や親戚、学校の先生)からのすすめを直接的な美大進学の理由として挙げる者はごく一部のみであるが、「自分の趣味と関係していたから」と回答した者の割合が6割弱と、高校・美術科出身者

の値（49.2%）と比べて高くなっている。非美術系高校、特に普通科の進学校では、美大は例年進学者の少ない「特殊」な進路に位置づけられているため、「自分の趣味と関係していたから」という理由が実際の進路決定に結びつくためには、そこに何らかの要因が介在していると推測される。そうした背景にある要因とは何か、それを以下での聞き取り調査の分析から明らかにしたい。

さらに、表5に示したのが、両親や先生から美大受験を反対されたか否かについての結果である。これを見ると、高校・美術科と比べて、それ以外の高校出身者の方が、両親あるいは学校の先生から美大受験を反対された割合が高いことがわかる。また、先生からよりも、両親から反対された者の割合が少し高くなっている。そうした違いがあるとはいえ、「とても反対された」・「少し反対された」を合計した割合は、両親、先生ともに2割以下にとどまっている。

表4 美術系大学・学部を選択した理由

	全体		大学・美術系学科		高校・美術科		高校・それ以外	
	複数回答	最重要理由	複数回答	最重要理由	複数回答	最重要理由	複数回答	最重要理由
将来美術に関わる仕事をしたいと考えていたから	82.1	49.9	78.8	41.4	92.2	58.6	78.8	47.0
専門的な技術や知識を身につけたいから	66.1	15.8	73.3	22.1	82.8	18.0	60.6	15.1
家族や親戚にすすめられたから	12.4	0.8	11.0	1.4	16.4	0.8	11.1	0.8
学校の先生にすすめられたから	17.8	1.2	21.2	2.1	37.5	3.1	11.1	0.5
美術が得意だったから	47.9	3.4	54.8	4.1	57.8	1.6	44.4	3.8
勉強が苦手だったから	19.1	1.4	21.9	0.7	21.1	0.0	18.3	1.9
大学の雰囲気に憧れていたから	28.2	3.0	26.0	2.8	38.3	2.3	24.6	3.2
自宅から通いやすかったから	5.5	0.0	3.4	0.0	4.7	0.0	5.8	0.0
自分の趣味と関係していたから	56.0	11.4	50.7	12.4	49.2	4.7	58.5	13.8
なんとなく	11.2	3.0	12.3	2.1	10.2	1.6	11.6	3.5
その他	12.0	10.0	12.3	11.0	11.7	9.4	12.2	10.3
合計 (%)	-	100.0	-	100.0	-	100.0	-	100.0
(N)	507	499	146	145	128	128	378	370

表5 両親・先生から美術系大学・学部受験を反対されたか否か（出身高校・学科別）

		とても反対された	すこし反対された	あまり反対されなかった	まったく反対されなかった	合計(N)
両親から**	高校・美術科	0.8	9.4	25.0	64.8	128
	高校・それ以外	6.4	16.5	26.9	50.3	376
	高校計	5.0	14.7	26.4	54.0	504
先生から***	高校・美術科	1.6	5.5	8.7	84.3	127
	高校・それ以外	3.5	11.4	21.0	64.1	376
	高校計	3.0	9.9	17.9	69.2	503

注：†: p<0.10, *: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001. χ^2 検定による。

しかし、先行研究では、美大には上位・中堅進学校出身の学生が多くいるが、進学校の進学指導において少数派である芸術系進路希望者は疎外されがちであり、また芸術系志望であるが成績優秀な生徒に、教員が進路変更を促す場合もあること（生駒 2010）、さらには保護者の側も、大卒後の就職状況が不安であるなどの理由で、学校での進路面談においては子どもの美大進学に否定的である場合が多いこと（生駒 2007）が指摘されていた。これらの知見から、美大をはじめ芸術系分野への潜在的進学者は普通科等の非美術系高校でも無視できない人数で存在するが、身近な他者からの反対が根強く、それを押し切ってまで美大進学を可能とした者はそれほど多くはないこと、美大進学には家族などの周囲の理解やサポートが必要となることが示唆される。

では、特にどのような生徒が、美大進学を希望した際に、身近な他者、特に両親から反対されたのだろうか。美大進学者のみを対象とした分析ではあるが、表6に示したのが、両親からの反対の有無を被説明変数として二項ロジスティック回帰分析を行い、その規定要因を探索した結果である⁵⁾。表6から、まず全体の結果を見ると、地方部出身で、非美術系高校に通っており、現

表6 両親からの反対の有無の規定要因（二項ロジスティック回帰分析）

被説明変数：「両親から反対あり」か否か	全体		高校・美術科以外	
	係数	S.E.	係数	S.E.
性別：女性（基準：男性）	0.273	0.348	0.184	0.367
大学所在地（都市部=1，地方部=0）	0.183	0.368	0.248	0.411
大学ランク（上位=1，中位=0）	0.334	0.337	0.271	0.374
学科（基準：美術系学科）				
デザイン系学科	-0.635	0.361†	-0.785	0.397*
理論系学科	0.558	0.497	0.335	0.534
その他の学科	0.213	0.521	0.037	0.569
入学状況（現役入学=1，それ以外=0）	-0.806	0.297**	-0.627	0.324†
中学3年時の成績：すべての科目（5段階）	0.147	0.144	0.172	0.156
中学3年時の成績：美術（5段階）	-0.080	0.158	-0.058	0.171
高校・学科（美術科=1，それ以外=0）	-0.877	0.385*	-	-
高校・大学進学者割合（5段階）	0.234	0.130†	0.255	0.146†
出身地（都市部=1，地方部=0）	-0.695	0.280*	-0.637	0.305*
父・学歴（大学・大学院卒=1，それ以外=0）	-0.092	0.311	0.016	0.343
母・学歴（大学・大学院卒=1，それ以外=0）	-0.074	0.310	-0.370	0.336
父・職業（専門・技術職/管理職=1，それ以外=0）	-0.536	0.292†	-0.634	0.320*
芸術系学歴保持家族（いる=1，いない=0）	-0.759	0.538	-0.697	0.549
芸術系職業従事家族（いる=1，いない=0）	-0.078	0.477	0.042	0.489
両親・世帯年収（基準：600万円未満）				
600万円以上1000万円未満	-0.378	0.330	-0.252	0.360
1000万円以上	-0.805	0.465†	-0.536	0.485
無回答	-0.541	0.379	-0.509	0.428
定数	-0.857	0.915	-1.115	0.995
-2対数尤度	377.811		317.220	
χ^2 値（自由度）	50.023(20)***		39.738(19)**	
Nagelkerke R ²	0.198		0.172	
N	430		327	

注：†：p<0.10，*：p<0.05，**：p<0.01，***：p<0.001。

役入学ではない場合に、両親から反対される傾向があることがわかる。性別や両親の世帯年収は5%水準以下で有意な効果を示していない。また、高校・美術科出身者と比べて両親からの反対を受けやすい、普通科等の高校出身者に対象を限定すると、全体の分析とは一部異なる結果が見られる。すなわち、地方部出身で、専門・技術職／管理職以外に従事する父親を持ち、デザイン系学科以外に進学した場合に、両親から反対される確率が高くなっている。これらの結果から、両親からの美大進学への反対は、ジェンダーや家庭の経済的な問題よりも、専門的に美術を学び仕事にすることに対するイメージの難しさの結果生じていると解釈できる。

3.2.2. 美術系大学の選択の背景要因

つぎに、聞き取り調査をもとに、非美術系高校から美大への進路選択を促した要因を検討する。美大進学には様々な要因が関係していると考えられるが、以下では分析の結果抽出された4つの要因、すなわち a) 制作行為の身体化、b) 他者からの役割期待、c) 美術系予備校・画塾／大学文化との接触、d) 存在論的安心の確保を取り上げ、それらが美大選択に及ぼした影響について述べる。

第1に、【制作行為の身体化】、日常的なモノづくり・描画という身体化された文化資本（ハビトゥス）の有無が、美術系高校だけでなく美大進学にとっても影響していると言える。例えば、上村（女性 B 大学・油画4年）がそうであり、「[[小さい頃から父や叔父が趣味でやっているのを見ていたから、自然と] 美術を始めており、美大進学も] 自然とそういうものだと思ってた。色々選択肢はあったが、小さい頃からの夢みたいなものにかけてみることにした。無鉄砲だったんだと思う。*」と語っている。彼女の父親や叔父は美術関係の職に就いてはいないが、趣味でモノづくりをしており、かれらとの相互行為によって美術と親和的なディスポジションが形成されたと考えられる。また、安田（女性 D 大学・油画4年）も、以下のように、日常的に絵を描いたりモノづくりをしたりすることが好きであったため、中学生の頃から「当たり前のように」美大進学を念頭に進路を考えていたという。

——美大とか進もうと思ったのはいつ頃なんですか？

安田：いつだろう、でも、美大、いつですかね、でも、中学の時に、高校を普通 [科] にするか美術 [科] にするかという話の時に、なんかもう、すでに、大学は美術系みたいなことは、考えてたかな。あんまり迷ってたほうじゃないです、美術系と普通のところどうしようとかって、迷ったことはなかったです。当たり前、うん、当たり前みたいに、大学は美大にしました。

第2に、中学段階における美術系高校の選択と同様に、【他者からの役割期待】が挙げられる。高校段階においても、教員や親などからの勧め・後押しによって、美大への進学が可能な選択肢として急浮上してくる。例えば、白石（女性 A 大学・油画院2年）は、絵を描くことは好きだったが、高校の美術教員に「美大に行くべきだ」と勧められるまでは特に美大進学は考えておらず、将来は保育士（「保母さん」）になろうと考えていたという。また、教員の働きかけに加え、後述する美術予備校からの影響も、美大に進もうと決めたまっかけであったという。

白石：高校3年生の時に、はじめ、保母さんになりたいと思って、先生に相談したんですよ（笑）。美術の先生が、美大に、を勧めてもらって、美大に行くべきだみたいなことを言われて（笑）、そんなに好きなら、で、ちょっと美術系の大学を意識するようになって……親は無理だと言ってたんですよ（笑）それで、夏から夏期講習でA予備校っていうところに行ったんですけど、そこから、なんかもう、美術の大学に行こうって思いましたね。

さらに、直接的な他者からの勧めや後押しだけでなく、間接的に、すなわち美術に熱心に取り組む友人等との相互交流の中で、美術の道に進むことを自らの役割として獲得した者も少なからず見受けられた。例えば、小原（男性 E 大学・工芸4年）は、「美術で生きていくと決めたのは、中学二年生のときに……漫画を描いている友だちと知合ったことがきっかけでした。彼は進学校に進んだ後に公立の美術大学に進学しました。私にとって彼は今でも憧れの存在です。*」と語っている。

このように他者からの直接的・間接的な働きかけが、美大への進路選択を促進する要因になっていると考えられるが、そうした他者の影響はどの時期でも見られる訳ではなく、特に高校時代、進路希望調査・進路別クラス分けが行われる時期に発動される傾向があると推察される。例えば、渋谷（女性 B 大学・油画4年）は、以下のように、進路別クラス分けの時期になってようやく、美術とは程遠い環境から徐々に美大進学を考えるようになった経緯を語っている。

渋谷：将来のことあんまり考える子どもじゃなかったの、[中高一貫校の] 高校生の頃、[高1のクラス分けで] いざ大学を決めなきゃいけないときに、まあ、普通に国立の大学に行こうと思ったんですよ、そしたら、美術の、[中学時から見てもらっていた] 高校の美術の先生に、美大があるって話を聞いて、結構1年間ぐらい、美術に進もうか、国立系の大学行くときは、歴史が好きだったので、歴史を研究する科目に進もうか悩んで。だから、ホント、その勧めというか、先生に言われた時は、完全に画家の名前もピカソとモネぐらいしか知らないぐらい、小っちゃい頃から美術館に親に連れてかれた経験もないので（笑）、ホントゼロから、あの時は色々触れたり、考えたりして、ホント未知の世界でした、あの時は。美術を職業にしている人がいるってことに、今まで全く気がつかずに生きてきたので（笑）。

ちなみに、質問紙調査から、美術系大学・学部への進路決定時期を確認しておこう（表7）。進路決定時期を高校・学科別に見ると、高校・美術科出身者の場合、高校入学時点ですでに美大進学を希望していた者が4割程度いるのに対して、普通科などの高校出身者の場合、「高校1～2年生」が48.7%と最も高く、「高校3年生」が28%でそれに続いており、「中学2年生以前」・「中学3年生」の割合は2割以下にとどまっている。非美術系高校出身者では、美大進学が現実味のある選択肢として考えられるようになるのは、進学希望先の大学・学部を決める必要性に迫られた時点であることがここから推測される。

第3に、転機としての【美術系予備校・画塾／大学文化との接触】についても言及する必要がある。まず、美術系大学文化との接触について見ていこう。美大における学園祭・芸術祭やオープンキャンパスなどでは、実際に学生の作品が展示されていたり、ワークショップが開催された

表7 美術系大学・学部への進路決定時期（出身高校・学科別）

		美術系大学・学部への進路決定時期					合計 (N)
		中学2年生 以前	中学 3年生	高校 1～2年生	高校 3年生	高校 卒業後	
高校・学科***	美術科	20.3	19.5	40.6	19.5	0.0	128
	それ以外	7.9	8.2	48.7	28.0	7.1	378
	高校計	11.1	11.1	46.6	25.9	5.3	506

注：†: $p < 0.1$, *: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$, ***: $p < 0.001$. χ^2 検定による。

りと、いわゆる「一般大学」⁶⁾のそうしたイベントとは趣が異なるところがある。そうした機会に美大の大学文化に触れ、ある種のカルチャー・ショックを経験することで、自らもそうした空間で学びたいと思うようになる例がいくつか見られた。例えば、「The 平凡」って感じの普通科高校に通っていた河合（女性 C 大学・彫刻4年）は、小さい頃から絵を描くことが好きだったが、美術の道へ進むことは半ば諦めており、一時期は心理学系の専攻に進もうと考えていた。しかし、母親の後押しのもと、美術の道も考えるようになり、高校2年時に母と一緒に参加したC大学の学園祭に強い刺激を受け、C大学合格を目指すようになったと彼女は語っている。

河合：その時ホントにやりたいことなんだろうって考えたときに、親と話して、美術って道もあるんじゃないかっていう、母親が割と後押ししてくれたっていうか。……割となんか、美術で食べていくのとかもすごい大変なことっていうのは、子どもでもわかってたことだし、そっち方向、方面に進むのは避けてたところがあって、大学進学考える頃まで。でも、諦められなかったんですね、それで、行って、勉強してみたいっていう気持ちが芽生えて。で、親が、高校2年の時、…… [C大学の] 学園祭に連れて行ってくれたんですよ……で、行ったときに、作品がいっぱいあって、割と内輪向けなんですけど、すごい馬鹿騒ぎしてて、ここ楽しんじゃないかなって思っちゃって、うっかり（笑）で、C大学に行きたいって思っちゃったんですよ。

さらに、非美術系高校から美大への進路選択を考える上で見逃せないのが、美術系予備校・画塾の影響である。喜始（2016）によると、美大の学生のうち、美大受験に際して美術系予備校・画塾を何らかのかたちで利用した者は7割以上いることが指摘されているが、以下の寺田（女性C大学・油画4年）の語りにあるように、美術予備校で「周りに触発され」たことで、一般大学への進路を再考し、より真剣に美大進学を考え始めるようになったという例はいくつか見られた。予備校文化との接触がなければ美大進学もそれほど真剣には考えられなかったという語りから考えると、予備校は美大を含めた美術界への架橋装置としての機能を有することが指摘できよう。

寺田：最初に美術系のことをやりたいなあっていう風に思ったときに、最初美大じゃなくてもいいかなあって思ってたんですよ、美術科のある一般大学……それでもいいかなあっていう風に思ってたんですけど、でも、予備校に通い始めて、結構周りに触発されて、美大に行きたい

っていう風になって、美術もっと真剣にやりたいなって思い始めて、それで美術大学目指しましたね。高1とかそれくらい、中学生くらいの時は、たぶん普通の一般大学に行くだろうなっていう風には思ってたかもしれないです。

坂口（女性 C 大学・油画4年）も、高校1年生の時に初めて通った美術予備校の雰囲気刺激を受け、「自分もこの中にいたい」と思い、美大進学を考えるようになったことを語っている。さらに、彼女の語りで注目されるのは、そうした予備校での経験が、その後高校2年時での進路選択において、彼女が美大を選択することを「ホントに自然に」させる一因となったということであり、予備校文化との接触は、美大進学に邁進するよう彼女の視界から他の選択肢を消失させる役割を果たしたためである。

——美術系の大学に進もうって思ったのはいつ頃なんですか？

坂口：たぶん、高1で漠然と考えてました。高2で進路選択になるんですけど、そのときにもう芸術を選んでたんで、高1で、もうホントに自然に。高2で進路選択になる時に、もう美術の授業なくなるじゃないですか、選ばないと。「えっ、なくなるなんて」みたいな（笑）、そういう感じで、うん、ホントに自然に、でした。

——他は考えなかったんですか、一般大とか

坂口：うーん、ちょっとは考えたかもしれないですけど。あっ、高1の時に、美術の予備校に夏期講習とか行ったんですよ、1週間くらい。で、異様な、何て言うんですかね、今までそんな美術を本気でやろうっていう人たちと出会ったことはなかったんで、すごい異様で。だから、すごい刺激を受けて、こんなにいるんだって。だから、そこはおっきかった、自分もこの中にいたいっていうか。自分なんてまだまだなんだなって思ったら、自然とそっちに進みたいっていう風に思った気がします。

——同じ高校から行く人いないんですか、美大に

坂口：そうですね、いなかったですね。たぶん4人とか5人とかそういう世界でした。そのうち、私の年は絵画を受けたのは私一人で、あとはみんなデザインとかでした。……高校の時、3年間教わっていた先生が、[美大の] 油絵科 [出身] の先生だったので、すごい熱心に教えてくれて。なので、私も油絵にのめり込んでいったっていうのはあります。

なお、予備校や画塾に通うきっかけは、例えば、公立の進学校に通っていたが、高校2年生の時に知り合った友人が美大進学志望であり、その彼女に誘われて予備校の体験授業に参加した山内（女性 C 大学・油画4年）のように、他者からの、時には偶発的な働きかけによって生じる場合と、中高一貫の進学校（男子校）で、高校からは美術の授業がなくなり、美術部もなかったため、高校1年生の時に「地元の研究所に凄いどきどきしながら、先生を訪ねて」いったという児玉（男性 C 大学・油画4年）のように自己主導的にもたらされる場合がある。

先の美術系高校や大学の文化からの影響とあわせて考えるならば、それまでの自分の日常とは異質な、美術に関わる生活や生き方に直面し、その魅力を感じ取るという経験を美術系予備校・画塾という空間が提供したのだと言えよう。ただし、こうした日常的に美術活動に勤しむ他者と

の出会い、学校内においても生じうる。中高一貫の進学校（男子校）出身で、他の生徒たちが難関大学を目指す中、自らは「落ちこぼれ」だったという小松（男性 C 大学・日本画4年）の例を見よう。彼は、高校時代は美術部に所属し、美術館に行くのも好きで、「いろいろなことに悩むなかで、ふと見に行った美術作品に助けられたような経験もした」がそれだけでは美大進学を決断することは難しかったと語る。それに加えて、教員からの影響、具体的には「私が通っていた高校の美術の教師は、美術大学を卒業して教員をしながら旺盛な創作活動をしている方で、その先生と触れ合う中で創作活動をしながら生きていく、というキャリアのイメージを具体的なものにできた」ことが、彼の進路選択に大きく関わっていると考えている⁷⁾。また、美大に進学する者はあまりいない「超普通校」に通っており、中・高は吹奏楽部だったという竹田（女性 C 大学・彫刻院2年）も、高校に非常勤講師として教えに来ていた工芸家の先生の授業（選択美術）で、芸術の自由さや広さを感じたこと、そしてそこで、その後も一緒に美大に進学することになった親友と出会ったことを美大選択のきっかけとしている。

最後に、上記の小松の事例とも関連するが、美術に関わる活動や事柄に触れていることが自己の【存在論的安心の確保】に繋がっており、それが美大進学を促進する要因となった場合もある。非美術系高校出身である分析対象者は進学校（進学コース）に通っていた場合が多いが、美術系高校選択の語りとは異なり、かれらは美大への進路選択に関して、学力による序列化への強い抵抗感を直接的に語ることはほとんどなかった。そのかわりに、学力主義の強い影響下にいた進学校出身者にとって、美術の授業やそれがおこなわれる美術室を含めた美術に関わる諸事柄が、学力主義が強い学校内において存在論的安心を確保するための「シェルター」としての働きをする場合があることが見出された。美術室に「半分逃げ込むような感じで」通っており、そこで美術の面白さや奥深さを知った杉本（女性 A 大学・油画院2年）がそうである。

杉本：[高校の美術の]先生は、直接習って良い思い出とかはなくて、普通の学校だったから、美術室に半分逃げ込むような感じで行って、居心地が良いところに行きたいじゃない（笑）、書庫があったから、そこに籠もって、古い『芸術新潮』とか『美[術]手帖とか』……ホントあの頃のやつが面白くて、A大の子もよく言うけど、そういうので現代アートとか興味持ち始めて……評論とか読むようになって、やっと美術を勉強してる、アカデミックなことをしてるって意識になったのかなって感じ。美術の授業よりは、その美術室の書庫で見たことの方が。

また、勉強では他の生徒に劣等感を持っていたが、美術だけには自信を持っており、そこで自らの誇りの回復をしていたという坂口（女性 C 大学・油画4年）などの語りにも、そうした「シェルター」としての側面があらわれている。

——結構[出身高校は]進学校ですね

坂口：だから余計に、何て言うんですか、進学校について行けなくなるのも、ハングリー精神じゃないけど、美術だったら私はみたいなところはあって、たぶん余計のめり込んでいったんだろうな。他で劣等感がある、っていうのもあると思います。それがすごい、自信じゃないけ

ど、誇りみたいにしておかないと、していたっていうか、勉強は出来ないけどみたいな(笑)、っていうのはすごい自信になってます。

彼女ら2人は、どちらも中高一貫の進学校出身者であるが、そのように長年、学力主義が強い学校文化の内部にとどまらざるをえなかった中で、学力主義との距離化をはかるための契機を「周辺教科」(小松編 2012)とも位置付けられる美術や美術室という空間がもたらしていたのだと言えよう。また、美術による肯定的な経験の蓄積や他者への自己の開示を通じて、美術系進路の選択がより彼女ら自身にとって大きな意味を帯びるものとなっていったのではないだろうか。

ここでの内容と関連して、質問紙調査の結果(表8)から、高校2年生の時の成績を見てみると、先に示した中学3年生時の成績分布(表3)と異なる特徴が表れている。表8を見ると、非美術系高校出身者の場合、美術を「非選択」の者も2割程度いるが、高校2年時の美術の成績が「上のほう」・「やや上のほう」が大多数を占めている一方で、すべての科目の成績が「上のほう」・「やや上のほう」であった者の割合は3割弱にとどまっている。高校内での学力的序列の中では下方に位置付けられるが、美術においては高い成績を維持していた者が、普通科等の高校出身者では多くいることがわかる。さらに、表9の高校生の時の学校生活満足度(「高校生のとき、学校生活に満足していた」)の結果を見てみると、「(あまり+まったく)あてはまらない」と回答した者の割合は、高校・美術科では2割以下であるのに対して、美術科以外では3割以上とな

表8 高校2年生の時のすべての科目・美術の成績(出身高校・学科別)

		校内での成績					非選択	合計(N)
		上のほう	やや上のほう	中くらい	やや下のほう	下のほう		
高校2年時 すべての科目***	高校・美術科	19.7	30.7	28.3	16.5	4.7	-	127
	高校・それ以外	12.3	17.2	39.9	20.2	10.4	-	366
	高校計	14.2	20.7	36.9	19.3	8.9	-	493
高校2年時 美術***	高校・美術科	37.3	34.9	20.6	3.2	2.4	1.6	126
	高校・それ以外	46.6	19.6	9.7	1.1	1.1	22.0	373
	高校計	44.3	23.4	12.4	1.6	1.4	16.8	499

注：†: $p < 0.10$, *: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$, ***: $p < 0.001$. χ^2 検定による。「高校・美術科」において、「美術」を「選択していない」は考えにくいだが、少数のため、そのままとした。

表9 高校生の時の学校生活満足度(出身高校・学科別)

		高校生活満足度				合計(N)
		とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
高校・学科***	美術科	48.8	35.4	14.2	1.6	127
	それ以外	25.7	40.8	19.6	13.8	377
	高校計	31.5	39.5	18.3	10.7	504

注：†: $p < 0.10$, *: $p < 0.05$, **: $p < 0.01$, ***: $p < 0.001$. χ^2 検定による。

っている。あくまで美大進学者内での比較であるが、学力主義的な価値観が広がる学校の中で何らかの不満・不安を抱いており、それを解消するための方法として美大進学を目標として位置づけ、美術活動に専心していった者も、非美術系高校出身者には一定数存在すると推測される。

4. ま と め

以上、本稿では、美大の学生への質問紙調査及び聞き取り調査をもとに、1) 美術系高校出身者の中卒後進路選択とその後の美大進学の間緯、2) 普通科等の非美術系高校出身者の美大への進路選択を検討した。おもな知見は以下の通りである。

第1に、美術系高校出身者の場合、将来美術に関わる仕事をしたいと考え、高校入学した者が多い。その背景の一つには、日常的な美術との関わりの中で培われた専門美術（家）への憧憬がある。しかし、そうした本人の志向性だけでなく、他者からの役割期待（勧め、後押しなど）、学力による序列化への違和・抵抗感、美術系高校文化との接触が、美術系高校への進路選択を促進する要因ともなっていた。さらに、高校入学後は、カリキュラム・トラッキングの効果や教員の働きかけにより、分析対象者たちは、美大進学を自然なこととして捉える傾向が見られた。

第2に、普通科等の非美術系高校出身者の場合も、専門的に美術を学び仕事にしたいとの理由から美大進学を選択している。また、かれらのうち進学校に在籍していた者が多数を占めるが、両親や先生から反対を受けた者は少数派であった。非美術系高校から美大への進路選択に関しては、制作行為の身体化、他者からの役割期待、美術系予備校・画塾／大学文化との接触、美術との関わりによる存在論的安心の確保が促進要因となっていることが示された。

以上のように、美術系高校や美大への進路選択が可能となる背景には、先行研究（生駒 2007, 喜始 2018 など）で指摘されたように、本人の志向性や幼少期からの制作行為の身体化、他者からの高い評価が関係する。しかし、それだけでなく何らかの転機が存在があった。酒井らは、進路多様校の事例から、「高校生の進路選択における転機が存在がジェンダーによって構造化されて」（酒井ほか 2007, p.111）おり、「転機が明確に見られたのはもっぱら女子であった」（同書, p.111）ことを論じたが、本稿の事例では男女ともに転機の語りが見られた。より詳細な検証が必要であるが、生徒の進路選択過程における転機の影響は、ジェンダーだけでなく、かれらが属する学校・クラス内でのポジションや選択対象となる専攻分野によって異なる可能性がここから示唆される。

さらに、本稿の事例から、他者の影響については、家族や教員からの働きかけだけでなく、学校の同輩集団内でのポジショニングや他生徒からのラベリングも重要であることが明らかになった。「友人は個人の『能力 (ability)』の感覚や同輩に対するポジションを構築する上で重要な役割を演じた」（Brooks 2003, p.292）のである。また、美術系高校や美大への進路選択は、そうした身近な他者との関係性の中で、学校教育という場において重視される学力主義という価値観と向き合い、問い直す過程としての側面を持つことも見出された。受験に際して教員・生徒間で暗

黙裡に共有されたゲームのルールを部分的に攪乱し、「自らが好んで所有する特定種の資本（中略）の価値を高め」（Bourdieu & Wacquant 訳書 2007, p.134）るための一つの試みとして、また、他者に対してオルタナティブな人生の可能性を提示し、自らの存在論的安心を確保するための戦略として、美術分野への進路選択は位置づけられるのではないだろうか。ただし、今回の分析対象は比較的選抜度の高い美大、特に美術系学科の学生が中心のため、今後は美術・芸術分野以外に進学した学生との比較のもと、美術系教育機関への進路選択の特徴をより明瞭化していきたい。

注

- 1) ()内の大学情報は、所在地、学校種別、学生規模、大学ランクの順である。なお、大学ランクは美術系大学間での相対的な位置を意味する。
- 2) ()内の大学情報は、注1)と同じ。
- 3) 本稿では、酒井らと同様、進路選択における転機を「生徒のそれまでの進路展望や動機付けの度合いが大きく変わるような何らかの経験」（酒井ほか 2007, p.111）という意味で用いる。
- 4) 質問紙調査から、高校・美術科以外の出身者（N=367）について、「同級生のうち大学進学をした人の割合」を見てみると、「95%以上」が46.3%、「80%以上95%未満」が27.0%、「60%以上80%未満」が16.3%、「40%以上60%未満」が5.4%、「40%未満」が4.9%となっている。
- 5) 被説明変数は、「(とても+すこし) 反対された」=1、「(あまり+まったく) 反対されなかった」=0として投入した。紙幅の都合上、投入した諸変数の基本統計量の掲載は省略した。
- 6) 美大とそれ以外の「一般的な」進路と考えられる大学・学部とを区別する際に、美大／一般大という区分が、美大の学生をはじめ美大関係者の間ではしばしば用いられる。
- 7) 電子メールによる追加インタビューより引用。メール受信日は2013年5月24日。

参考文献

- ベネッセ文教総研, 2002, 『学生満足度と大学教育の問題点 2001年度版』ベネッセコーポレーション.
- Bourdieu, Pierre and Loïc J. D. Wacquant, 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, University of Chicago Press. (=2007, 水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待』藤原書店.)
- Brooks, Rachel, 2003, “Young People’s Higher Education Choices: The Role of Family and Friends”, *British Journal of Sociology of Education*, 24(3), pp.283-297.
- 生駒俊樹, 2007, 「大学生のキャリアデザイン形成過程の研究——芸術系大学学生の大学受験までのライフヒストリー」『京都造形芸術大学紀要』第12号, pp.191-205.
- 生駒俊樹, 2010, 「キャリアデザイン形成過程の研究——芸術系大学生の進路選択」『キャリアデザイン研究』第6号, pp.103-112.
- 喜始照宣, 2016, 「美術系大学の学生の子備校・画塾経験——学生への質問紙調査をもとに」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第55巻, pp.79-89.
- 喜始照宣, 2018, 「だれが美術系大学に進学したのか——学生の子ども時代の美術活動・経験に着目して」『子ども社会研究』24号, pp.151-166.
- 小松佳代子編, 2012, 『周辺教科の逆襲』叢文社.
- 酒井朗・広崎純子・千葉勝吾, 2007, 「転機の存在とジェンダーの影響」酒井朗編『進学支援の教育臨床社会学——商業高校におけるアクションリサーチ』勁草書房, pp.109-137.

[きし あきのり 教育社会学]